

故率天下靜不復行役扶助微氣成萬物也伊川易傳曰陽始生甚微安靜而後長故復之象曰先王以至日閉關朱子曰一陽初復陽氣甚微不可勞動今日饘を製し家人奴僕等にもあたへ陽復を賀すべし又先祖考妣の靈前にも獻じ茶酒をそなへ新果をすむべし冬至の日鑽燧改火は瘧疫を去と續漢書禮儀志に見えたり燧を鑽とは木をもみて火をとる事也杜子美が冬至の詩に天時人事日相催冬至陽生春又來刺綉五紋添弱線吹葭六管動飛灰岸容待臘將舒柳天氣衝寒欲放梅雲物不殊鄉國異教兒且覆掌中杯略

〔執苑日涉七〕民間歲節下 冬至之日醫家作赤豆飴爲神農會 明會典曰嘉靖十五年建聖濟殿于文華殿後以祀先醫遣太醫院正官行禮二十一年又建景惠殿于太醫院上祀三皇配以勾芒祝融風后力牧而附歷代醫師於兩廡凡二十八人略 歲遣禮部堂上官一員行禮太醫院堂上官二員分獻二殿之祭並以春冬仲月上甲日 歲時雜記曰至日以赤小豆煮粥合門食之可免疫 風土記曰天正日南黃鐘踐長是日始芽動爲饘粥以養幼俗尙以赤豆爲糜所以象色也

〔東都歲事記四十一月〕冬至中略今夜太神樂來る今日諸人餅を製し家人奴婢にも與へて陽復を賀す又來年の略曆を封じて守とす今日錢湯風呂屋にて柚湯を焚く  
〔年中行事故實考十二月〕冬至 中華には佳節の第一とす履長の義を取これより日のながきことを祝す我朝にも古代は賀辭ありし今は絶たりこの日より日の長くなることを漢には一線の長を添といひ和にはひのふしだけ長くなるといふ諸說紛々として一決の義なし後來の博説をまつのみ

〔續日本紀九武〕神龜二年十一月己丑日 天皇御大安殿受冬至賀辭親王及侍臣等奉持奇翫珍贄

進之即引文武百寮五位已上及諸司長官大學博士等宴飲終日極樂乃罷賜祿各有差

〔續日本紀十武〕神龜五年十一月乙巳三日冬至御南苑宴親王已下五位已上賜繩有差

〔續日本紀十一武〕天平三年十一月庚戌日 冬至天皇御南樹苑宴五位已上賜錢親王三百貫大納言